

小学校 図画工作科 部会

部会長名 校長 金子 祥二
実践者名 教諭 田中 祐介

1 研究主題

「生きる力」を育む図画工作科指導の研究
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になってくる。

この激しい社会を担う子どもたちには、①生きて働く「知識・技能」、②未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力等」、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」資質・能力が求められる。そこで、学校においてこれらの資質・能力を育むためには「社会に開かれた教育課程」の理念に立脚した組織運営の改善と授業改善を図ることが重要であるとし、「カリキュラム・マネジメント」と「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善が提起されている。

(2) 図画工作科の目標から

図画工作科のねらいは、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、作りだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことである。

図画工作科の学習は、自らの感性を働かせながら、造形的な創造活動の基礎的な能力を発揮して表現や鑑賞の活動を行い、作りだす喜びを味わうものである。このような過程は、その本来の性質に従い、おのずとよさや美しさを目指すことになる。それは、生活や社会に主体的に関わる態度を育てるとともに、伝統を継承し、文化や芸術を創造しようとする豊かな心を育てることにつながる。

新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を図るにあたり、各教科固有の「見方・考え方」を働かせることを深い学びへつなげるものとして重視している。図画工作科では、これを「造形的な見方・考え方」として、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」としている。「造形的な見方・考え方」の特徴は、知性と感性を共に働かせて対象や事象を捉えることである。これを身体で

捉えていくことが、他教科以上に図画工作科が担っている学びであり、児童の「生きる力」を育む上で重要な働きをしていると考えられる。

(3) 児童の実態から

本学級の児童は、明るく元気のよい児童が多い。図画工作科に対しては、創造的な活動が苦手な児童が多い。また、ていねいな作業ができる児童と、最後まで集中できずに適当に作品を仕上げってしまう児童との差が大きい。何かするたびに「これでいいですか」と尋ねてくる児童も大変多い。

自分の作品を完成させることには集中できるが、友だちの作品に目を向け、そこから何かを感じるといったことはあまりなく、新たな考えを取り入れようとする姿は見られない。

このような児童の実態から、本実践の「うつつで見つけて」では、想像力を膨らませ、自分の表現したものを見つめ、そのよさを活かし、作品を作り上げることで、感性や想像力を働かせ、自分のイメージをもちながら価値をつくりだせるようにしたいと考える。

また、イメージを考えたり、友だちの作品を鑑賞したりする中で、友だちとの交流を重視し、自分と異なる考え方に触れて、自分の考えを形づくったり、広げたり深めたりすることにつなげていきたい。

3 主題の意味

(1) 「生きる力」を育む学習指導とは

「生きる力」を育む学習指導とは、各教科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間及び特別活動において、子供の発達段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げる3点の資質・能力を偏りなく育成できるような授業づくりを行うことである。

- ① 生きて働く知識・技能の習得させること。
- ② 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- ③ 学びに向かう力・人間性等を涵養すること。

(2) 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」とは

「主体的な学び」では、子ども自身が、興味をもって学習に積極的に取り組むこと、目的を認識し、学習へのふりかえりと見通しをもって学習活動に取り組むことが重要である。

「対話的な学び」においては、自分と異なる考え方に触れたり、向き合ったりすることで自分の考えを形づくったり、広げ深めたりすることにつなげていくことが重要である。

「深い学び」では、身に付けた資質・能力が活用・発揮されていくことでさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。学習活動においては、この3つの学びが互いに関わりながらバランスよく実現していくように授業を改善していかなければならない。また、各教科でこの授業改善を図るにあたり、各教科固有の「見方・考え方」を働かせることを深い学びへつなげるものとして重視

している。図画工作科では、これを「造形的な見方・考え方」として、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら、意味や価値をつくり出すこと」としている。この「造形的な見方・考え方」の特徴は、知性と感性を共に働かせて対象や事象を捉えることである。身体を通して知性と感性を融合させながら、対象や事象を捉えていくことが、他教科以上に図画工作科が担っている学びであり、そのことを意識して実践を行っていかねばならない。

4 研究の目標

第2学年図画工作科学習指導において「生きる力」を育むために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の在り方を究明する。

5 研究仮説

第2学年図画工作科学習指導において、次のような手立てをとれば、児童は感性を働かせながら意欲的に活動し、主体的・対話的で深い学びを行い、「生きる力」を育むことができるであろう。

- (1) 児童が表現意欲をもって取り組むことができるようにするために、目的を明確にする。
- (2) 児童が考えを広げるために、友だちとの意見交流をする時間を設定する。
- (3) 児童の資質育成のために、友だちの作品のよさにふれる鑑賞活動を設定する。

6 研究の計画

(1) 単元 「うつつして みつけて」

(2) 単元の目標及び指導計画

単元	うつつして みつけて	総時数	9 時間	時期	1 月
単元の目標	<p>○さまざまな形を写し取る活動を通して、形や色などに着目しながら、創造的に作ったり、表したりすることができる。 (知識・技能)</p> <p>○ローラー遊びやステンシルの表現から、楽しく構想したり、友だちの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができる。 (思考力・判断力・表現力等)</p> <p>○形や色などを視点に、比べたり、選んだりして作り出す喜びを味わうことができる。 (学びに向かう力・人間性等)</p>				
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)	
一	1 ・ 2	○ローラー遊びでローラーに慣れる。	○画用紙で版をつくり、切り抜いた部分やまわりをつかって形を写す。	○ローラーを使って、どんなことができるのか実際に活動させる。 ○多様なイメージをもたせるために、気付いたことを交流させる。	
二	3	○クリアファイルで自分	○クリアファイルに自分	○クリアファイルの端に	

	<ul style="list-style-type: none"> の形をつくる。 	<p>の好きな絵を描き、切り取って版をつくる。</p> <p>○色が付いていない版、色が付いている版に顔や模様、そのまわりの風景などをかきこんでいく。</p>	<p>型を作らないよう声かけする。</p> <p>○まわりの部分も使うことを知らせ、セロハンテープで切り口をとめさせる。</p>
三	<p>5 ○版を使って、作品作りをする。</p> <p>6</p>	<p>○版の内側とまわりの両方、裏表を使って作品作りをする。</p>	<p>○切り抜いた部分とそのまわりのどちらも使って作品を作ることを知らせる。</p> <p>○友だちの版も使っていいこととする。</p> <p>○多色で刷っていいことを伝える。</p> <p>○混色は2色までとし、毎回きれいに洗ってから色を変えさせる。</p>
	<p>7 ○ペンで作品を仕上げる。</p> <p>8</p>	<p>○版表現が終わったものに、ペンで顔や模様をかき込み、作品を完成させる。</p>	<p>○文字や言葉は使わないよう伝える。</p> <p>○お互いのよさに気づくことができるよう、作品を紹介し、友だちと意見を交流させる。</p>
四	<p>9 ○友だちの作品のいいところを見つけよう。</p>	<p>○鑑賞の活動を通して、気づいたことやいいと思った部分を表記させる。</p>	<p>○イラストの上手い下手ではないことを押さえる。</p> <p>○友だちと意見交流させ、多様な考え方があつることや表現の仕方を知らせる。</p>

7 指導の実際

【第1・2時】

本単元の指導にあたって、何をするのか、どんな作品を作るのかという見通しをもたせるため、画用紙で簡単な版を作り、作った版の内側だけでなく外側も版になることを体感させるところから始めた。どのようになるのか想像が難しかった子どもたちも、実際に行うことで、活動を通して理解でき、見通しがもてたようだった。



【下書き】



【版】



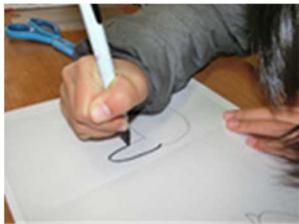
【試作品 1】



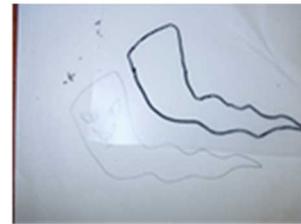
【試作品 2】

【第 3・4 時】

第3時では、本作品作りで使うクリアファイルの版作りを行った。クリアファイルの版は、紙と違い水に濡れても弱ることがなく、絵の具を拭けば裏も表も何度でも使えるという良さがある。前回の活動の要領で、自分の思い描く版を作った。このとき、繰り返しを用いて物語を想像することを伝え、キャラクターや顔だけでなく、動物の全身の姿を表現することを伝え、各自、動物や魚、クラゲ、鳥など好きなものを描いた。また、1つでは作品がさみしいので、版を2つ作ってよいことにした。生き物を作った子もいれば、木の形をした版を作った子もいた。作る際には、直接クリアファイルにかくのではなく、先に別の紙に下書きをさせ、それを油性ペンでクリアファイルに写しがきさせた。



【下書きを写す】



【写した版】

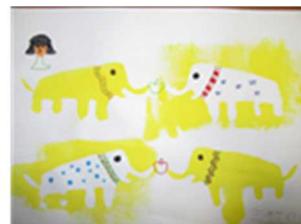


【版作り】

第4時では、前回作った作品を使って、作品を仕上げる練習をした。用紙に型が出来上がっているため、顔や模様、柄をかき込んだり、風景をかき込ませたりした。版が少なかったため、場面を想像することが難しい子もいたが、自分の好きなことをかき込み、版の型をうまく活かしている子もいた。



【かき込む様子】



【試作品 1】



【試作品 2】



【試作品 3】

【第 5・6 時】

クリアファイルの版を使って作品作りに取りかかった。前時まででやり方は理解できているので、色作りの約束や活動のための準備に多少時間がかかったが、子どもたちは楽しみながら作品作りに取り組んだ。色作りには、赤・青・黄・白の絵の具だけを使い、混色はその中の2色のみ。白を使う際だけ3色まで許可した。凝った色づけをした子は、

時間が足りず、次回に持ち越した子も数名いた。



【活動の様子】



【作品 1】



【作品 2】



【作品 3】

【第 7・8 時】

この時間は、前時まで仕上げた作品にペン書きを施し、作品として完成させた。顔、模様、風景など、それぞれが思い描いたことを好きに表現させた。子どもたちは、版の友だちと、どのようにするかや「これはね…」と自分の思ったことを描きながら話すなどしながら活動した。しかし、完成が近づくとやはり「これでいいですか？」と尋ねてくる子がいたので、丁寧にできたか、塗りむらはないかの確認だけを行い、自分が納得できたのであれば完成だと伝えた。



【かき込む様子】



【完成作品①】



【完成作品②】



【完成作品③】

【第 9 時】

最後の時間に、鑑賞の活動で、友だち同士の作品を見せ合い、いいところ探しを行った。ただ刷るだけでなく、2色を使って刷ったものや重なり合って刷った作品などがあったが、子どもたちはそれを良さとは感じにくいようだった。しかし、作品を見るその表情はとても明るく、にこやかだった。2年生のため言葉はまだ幼いが、感じるものは多くあったように思う。

8 研究のまとめ

本研究のまとめとして、事前事後の様子を比較した。

○ 事前の児童の様子

- ・自分だけで考え、自分のイメージだけで作品を作成していた。
- ・とりあえず、思いのままに表現して終わっていた。

○ 事後の児童の様子

- ・友だちとの交流を通して、よりよい発想ができた。
- ・ただ作るだけでなく、考えながら作る姿が見られるようになった。

のびのびとした子どもたちなので、図工を楽しみながら行うことはできていたが、考えながら作品に向かう姿勢が、多少なり感じられた。導入で簡単な画用紙を使った版作りの活動を行うことで、見通しが持てたことも考えることにつながったと考える。また、

個人制作ではなく、班での活動だったため交流しながら作品作りに取り組んだことも効果があったと考える。

「これでいいですか？」という子どもを減らしたく実践を行って見たが、なぜ教師に突き返されるのかを理解していないため、尋ねに来るのだと感じた。教師側が丁寧か、塗っていない部分はないかということに気をつけていることや、そうすることで作品がよりよくなることを理解させ、その視点を子どもたちがもつことができれば、「これでいいですか？」と尋ねて来る子どもは減るのではないかと考える。また、子どもの作品であって、教師の作品ではないことを考えなければならないと考える。

9 成果と今後の課題

- 導入で、簡単な画用紙を使った版作りの活動を行うことで見通しをもって、本作品作りに臨むことができた。
- 友だちの版も使い交流しながら作品作りをすることで、自分以外のよさやアイデアに気づくことができた。
- 版を使って刷るところで気持ちが切れてしまい、自分の作品の解説や鑑賞活動で気持ちが乗らない児童の姿が見られたため、手立てが必要だった。

◎ 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省
- 図画工作 学習指導書指導案編・開隆堂出版株式会社 ホームページ資料